



特244  
354

○圓まで買へる

興味津々たる

# 大阪製鎖株

付 浅川式デインの内容  
ゼルエンチン

# 始



日本景氣研究所編

特244  
354

### 伸び行く大阪製鎖

大阪製鎖は大正五年に創立されたる特殊鋼製品製造会社である。鋼製品、鑄製品、鋳、鎖の製造は他社の追随を許さず、其業績は累期向上の一路を辿り、正に鐵鋼業、鐵鋼工作業界の一異例とされてゐる。嘗て歐洲大戰當時當社は三、四割の好配當を斷行してその躍進ぶりは實に以て今日あるに適はしきものがあつた。然るに大戰後の不況と海軍軍縮と海運界の世界的不振の爲製品賣れ行きの減少、悪化に同社は相當の苦境にあつた。これを要するに當社製品が鐵鋼單一製品である爲受注先の不況でその影響が甚だしい。此處に於て經營者は既往の不況に次ぐ不況下の業界での辛酸をなめた結果當社は多角經營に進出する策を考究するに至り、鋳、鎖一點張りの作業から特種兵器、電氣工業、其他一般船舶附屬品を製造する外昇降機を製作する様になつて戦後の不況に備へた。造船界の不振とか海運界の不振にも對應するの經營策は本業の危険を負擔する副業經營の充實である。製鎖、電氣銲接、鑄鋼、エレベータ製造は永久的なもので時勢と共にその需要は漸増する傾向を持つ處に當社主腦者の着眼點の良さがある。伸びんとする大阪製鎖の經營策重點は副業經營を本格的収益源とすること、本業たる鋳、鎖製造機構の擴充策にある。



### 拂込徴収と資本力

軍需關係の會社であるから、今日今後の増収には太鼓印が押されてゐる。而して副業たる諸機械の製作がインフレ景氣と實質景氣の反響に依て工場設備の不足が、製品賣れ行き増加に依て起つて来る。此處に各工場擴張設備充實に資本の必要が益々急迫化する譯である。此の上本年一月に於ては溝ノ口齒車工場を四百萬圓で買収し、副業たる諸種製品製造が本業を凌ぐ程の躍進をなして居る。九年以上期の拂込資本が二百萬圓で十一年下期の増資拂込を合計すると實に活動資本（内部負債）が正味四百萬圓に達し、本年二月に於ては再び百二十萬圓の拂込徴収を完了して設備擴張に備へてゐる。然らば公稱資本金七百萬圓拂込五百二十萬圓となつた當社の財政及收支を如何に見るか。製鎖會社としての運命ではなく純然たる重工業會社機械工作會社として研究するに如何なるものか。因みに製品賣上狀況を見るに左の如くである。

	製品賣上高(千圓)	利益額(千圓)	割合(割)
五 年 上 期	九 九 三	八 一	〇、〇八
五 年 下 期	七 二 六	六 六	〇、〇九

年 度	製品賣上高(千圓)	利益額(千圓)	割合(割)
六 年 上 期	五 五 〇	六 八	〇、一二
六 年 下 期	七 三 二	六 五	〇、〇九
七 年 上 期	八 〇 三	六 二	〇、〇七
七 年 下 期	一、〇〇〇	一 二 〇	〇、一二
八 年 上 期	一、二〇〇	一 三 八	〇、一一
八 年 下 期	一、七〇〇	一 五 三	〇、〇九
九 年 上 期	二、〇〇〇	二 〇 〇	〇、一〇
九 年 下 期	二、四〇〇	二 一 〇	〇、〇八
十 年 上 期	二、七四〇	三 四 四	〇、一三
十 年 下 期	三、〇二〇	三 六 一	〇、一一
十 一 年 上 期	二、八五〇	三 四 七	〇、一二
十 一 年 下 期	三、五〇〇	三 四 九	〇、〇九

右表に依て見るに當社の製品賣上高は毎期増加傾向にあり、昭和七年八年のインフレ反映時代に於ける増加は倍加した位である。昭和七年下期に於ける製品賣上増加の理由は軍需品の注文生産があり、インフレ見越しで製品價格が昂騰し、反面諸材料のストックに依る値上り利益があり、一に時局の好影響

に依る。此外従来から計畫されてゐた諸種化學機械設備の活動化が大ひに効あつて収益力を大ならしめたのである。尙當時から銻接製罐及びエレベーター製品は世上に其の眞價を認められて來た關係上一般財界、業界の見越インフレに依る活況により俄然受注増となり収益急増となつたのである。此等の事情を參酌すると今回の拂込徴收には期待するものが多い。製品賣上額と資本力の關係を考察すると受注増加と設備不足から云へば完全なものと云へないが、第二次インフレ下の増收と製品賣れ行きから見て當然の經營策と云へる。要は従来から企畫されてゐた擴張設備の活動如何だが、資本膨脹と事業の時局性から觀察してその發展と製品賣上額の増加は必至必然のことと思ふ。

### 新資本と製品

インフレ景氣と實質景氣の時代に於て新資本は舊資本を倍以上の價値に認め尙且つ増資鳴物は舊資本の再評價の爲めに新資本の流入が起すのである。事業が有望なればこそ新資本の流入が起るのであるが、現實には製品賣れ行きと事業自體の性質と價値が舊資本の數量で購はれず、價値そのものが従来より多き資本を流入しなければ事業と資本價値とのバランスが取れなくなる。拂込徴收とか増資とかの鳴物が論ぜられるのはこれあるが爲である。故に資本の膨脹は事業の再評價と事業價値の上昇に依て起るものであると同時に舊資本の再評價、價値上昇と云ひ得るのである。拂込資本なり増資新資本は此の意味

に於て時代反響と製品價値の上昇事業の眞價を表現するものであると思ふ。かく云ひ得ると共に新資本の事業への流入は生産力増大への原動力でもあるのだから、事業内容と發展性新資本の活動、舊資本の價値倍加と云ふ三拍子揃つた好材料である。會社自體が伸びて行くのである。軍擴と生産力擴充問題の喧しき今日その擴充さる可き生産力とは一體何か？と云へば勢ひ機械工作、重工業設備とその生産力擴充より外にない。機械工業と鐵製品工業が重要視されるのはこの一大問題の前に置かれてゐるからである。生産力不足と新資本の活躍分野とは等しいものである。軍部も政府も皆此處に政策の重點を於いてゐる以上當社に限らず資本の膨脹はあらゆる意味から云つて妥當なものだ。因みに當社は陸軍、海軍の指定工場であり財政膨脹の影響を第一番に引受け、製品賣上げは當然増加する。要するに工業景氣時代が生産力擴充政策の最初の出現だと考へられる。工業景氣の源泉は機械工業景氣であるのだから當社の將來は益々有望と見なければならぬ。新資本の流用効率は全體的に見て會社自體の業績向上と製品賣れ行き増加とに依て判然する。財政の増大と工業景氣が考へられる今日、工業生産力の増大が必要となつて來る。工業インフレとは國家消費増大が工業製品不足、生産力不足の現象なのだから其處に製品賣上額の増加が必然的に起つて來る。新資本による資本膨脹がインフレ下の製品の好賣れ行きに依て價値づけられる。インフレが工業景氣の發足點であり、インフレが未だ續くと見るならば工業景氣の發展分野が未だある譯である。

### 製品内容と事業内容

當社の製品種目は錨、鎖を主體とし、元來が軍需工業會社と云ふべき性質のものである。處が永い間の不況とこれに對應する經營策として考究された副業製品即ち化學工業機械、人絹機械、昇降機、銻接製鐵等がある。此外同社は昭和八年上期以降、陸軍の指定工場として認められ鐵カブト、鐵舟及橋梁の製造に當つて居り、此等製品内容から見ても事業そのものは國家財政時局とに密接な關係を持つて居る。主たる製品たる錨、鎖は海軍の指定工場であり、我國に於ける唯一の工場である關係上海軍關係のもはもとより、船舶造船會社からの受注も相當多額に上る。時局と國策を反映する事業である反面インフレと工業景氣の餘波を受けて副業製品が好賣れ行きとなる。此處に事業の將來性と擴大性がある、亦事業そのものが軍需工業であり乍ら、平和産業の根幹たる諸機械、化學工業機械製作會社たる處に將來性が窺はれる。

### 受註増と利益内容

尨大豫算の中陸、海軍で總額の七割取られるのだから、軍需工業會社の受註増加は期して待つべきである。當社の十一年下期は拂込資本の増大と軍部關係會社たる立場から二分減配が餘儀なくされたが、

實質に於ては業績低下内容悪化などと云ふ理由は見當らない。では時局景氣を満喫する軍需會社であり乍ら何故減配したか。左に昭和五年以降累期業績を示せば

昭	利	利	配
和	益	益	當
五	金	率	金
年	(千	(割)	(割)
上	圓)		
期			
昭	八	一、〇八	六〇
和	一		
五	六六	八七	五〇
年			
下			
期	六八	九〇	五〇
〃			
六	六五	八七	五〇
年			
下			
期	六二	八〇	五〇
〃			
七	一一〇	一、六九	七〇
年			
上			
期	一三八	一、八四	七〇
〃			
八	一五三	一、六三	八〇
年			
下			
期	二〇〇	二、〇〇	九〇
〃			
九	二二〇	一、六四	九〇
年			
上			
期	三四四	二、二八	九〇
〃			
十	三六一	二、四〇	一、〇〇
年			
下			
期			

〃 十一年上期	三四七	二、三二	一、〇〇
〃 十一年下期	三四九	一、七五	八〇

これに依ると同社の利益金は毎期増加傾向にあることが分る。今日の拂込資本は四百三十萬圓に増大してゐるが昭和五年上期の八萬一千圓に對し十一年下期の三、五萬に達せんとする利益から云つて膨脹資本の流用効率は良く實質化されてゐる。尙云へば十一年下期は資本が昭和五年當時の約三倍弱に拘らず、利益額から云ふと四倍強に達するのだから、減配したからと云つて強ち悲觀の理由にはならない。

### 多角經營と實際

軍需工場としての價値が非常時と稱さるゝ場合に於てのみ活況を呈すると云ふのなれば、事業そのものは一時的なものであり、會社の増收時代に持続性がない。大きく見て軍擴そのものは半永久的なものであると云へるが、外交と軍事、經濟とが各國共に急迫化して來れば軍需工業にも永續性がある。併し軍擴には限度があり、人類の好戰思潮なるものが、一定期間經過すると冷却するから、軍需會社は資本を軍需品生産機構へフルに投下することは危険である。製鎖會社が製罐、エレベーター、電機銲接、鑄鋼、人絹機械、貯槽類、化學工業用機械製作をなすと云ふのはこの危険をカバーし、且つ軍需工業に生命のある時代からこの生産機構を充實し平和、戰時共に収益力を養成せんとする爲である。この意味

から堅實經營と多角經營が相通する道があると思ふ。永年の不況の爲め、業界は生産設備の萎縮を餘儀なくさせられてゐたのであるが、多角經營で資本の流用價値上昇及び、資本投下の危険分散を企圖する處に同社の先見の明が窺はれる。即ち不況下の事業經營の苦痛を多角經營で切抜け一面事業の繁閑を巧みに利用し、不況による資本流用効率を高め、資本運用を一層合理化する。第一次インフレ以來當社工場は軍擴の波に乗り、本業たる鋳、鎖製品の受注増に加ふるにインフレの反映から副業製品の受注が増加し、昭和六年以來の經營策が斷然有卦に入つた譯である。此處に於て初めて多角經營とその實際が軍擴インフレに伴ふインフレと共に本業、副業共に収益増實現時代となつたことは當路者の爲めに祝すべきである。

### 營政策と資本力

かくして多角經營を斷行せんとする主腦部の營政策は多岐多様に亘つてゐることは如上の如くであるが、永年の不況と業績低下から借入金金の架重に悩んだのは一再でなかつた。借入金利子、償却金負擔で利益率、利益配當の減少は已むを得ぬことだが不況切抜けと多角經營實施に資本力不足が其處に當然起つて來る。元來當社取引先は陸軍省、海軍省、鐵道省其他造船會社、諸會社であるから受注先が堅實である。これに對應する丈けの堅實經營策が肝要である。因みに昭和五年以降の活動資本を検討するに

左の如くである。

平均拂込資本(千圓)	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年
	下上	下上	下上	下上	下上	下上	下上	上
	期	期	期	期	期	期	期	期
一一、五〇〇	一一、五〇〇	一一、五〇〇	一一、五〇〇	一一、八七五	二二、五〇〇	三三、〇〇〇	四三、〇〇〇	五、二〇〇

(二月末拂込百二十萬圓)

右に依て分る如く昭和七年下期から今日迄の間に拂込資本は三倍以上に達してゐる。これは生産機構擴大と業績向上を反映するもので、時勢とインフレに恵まれた増收時代の表現と云ふべきである。見越

しインフレ時代の昭和七、八年頃からの設備擴張策が今日の實質インフレ下に於て生産力擴充となつて現はれ、漸く鋳、鎖製造から機械工作、化學工業機械製作會社として第一歩を踏み出したのである。受注増に對應する資本力の増大は必然的であつて少しも不合理性がない。時勢に近合した資本の増大傾向を見ても分る通り當社の資本増加は急轉的なものでなく、無理をせぬ新資本注入策を講じて居ることは一考に價する。

### 資産内容と資本構成

去る二月末、懸案の拂込増徴を行つて拂込資本金はこれで五百二十萬圓となり、未拂込は百八十萬となつた。併し時勢と財界状態は未だく當社の資本膨脹を餘儀なくせしめるであらう。十一年下期末總資産八百三十萬五千圓から拂込増徴までの経緯を論ぜんとするに左の如し。

總 資 産	八、三〇五
固 定 資 産	四、三六四
活 動 資 本	三、九四一
内 部 負 債	五二三、二
外 部 負 債	三〇七、三

以上を検討するに總體的に資産構成は良好である。外部負債の主なるものは雑借入金と支拂手形が二百七十二萬六千圓で三百萬圓餘ある。当期は溝口齒車買収資金として興銀より借入金三百萬圓が増加してゐる。支拂手形は無論商業手形もあるが借金に屬するものが百五、六十萬圓である。すると當社の現在外部負債總額五百七十萬餘圓でこれを現在總資本と綜合して内譯すると

内部負債	六、四三二(千圓)
外部負債	四、〇七三

依り拂込資本金五百二十萬圓に對し負債が四百萬圓あるのだから溝口齒車買収以前より當社の資産内容は悪化してゐるかに見える。支拂手形二百七十萬圓で、借金は百五、六十萬圓更に今期に入つて、齒車工場買収代金未拂分三百五十萬圓を支拂ひ合計五百二十萬圓の借金になる處、百二十萬圓の拂込徴収で正味借金四百萬圓となる。この説明からすると拂込資本金五百二十萬圓に對し、借金が多過ぎる嫌がある。當社は今後尙相當の資金を必要とする。即ち各工場の擴張充實費に百萬圓、ディーゼル工場の新設に百萬圓以上を要する勘定になる。かくして擴大する設備の運轉資金を五、七十萬圓として相當の資金が必要になつて來る。如何に擴張費が多額に上らうが事業が有望であり、成績さへ向上すれば第二第三の拂込徴収が斷行し得るから心配はあるまい。借金經營から業績向上による資本膨脹への過程にあるのが大阪製鎖の今日である。

## 上期の業績は

重工業景氣が未だ伸びられると當社の業績向上も未だ續くと考へられる。昨年下半年は製品賣上額が三百五十萬圓であつたが、昨年下半年以降のインフレで物價高に煽り立てられて製鎖も大繁忙である。製鎖、製鐵、化學工業機械の需要増に依る時代反映で収益は益々増大する。民間に於けるインフレが平常化して來ると一般向き機械が、軍需工業以外の仕事として活況を呈して來る。而して此處で注目すべきは、當社が財政増大に依る財界活況の餘波を受けて軍需注文と云ふ半永久的得意先をもつてゐることである。此他平和産業の原動力機械製作に従事して賣上増加を圖ることが出来る。今期の利益を四百五十萬圓と見て前期並に利益率を一割とすれば四十五萬の利益になる。處が原料高で賣上高増加に依る利益増大を減殺される懸念はないが、製品で原料高をカバーし得るから結局利益増加は必至である。製品の採算も如上の意味から利益増となるし、利益割合を前期の一割から一割二分として五十四萬圓の増益が計上し得る。要は膨脹資本に對する配當負擔が重くなることを考察する時、今後の業績向上如何が會社の將來を左右することからすれば一寸問題だが、この懸念は今後の収益力で少しも問題でなくなる。以上は溝口齒車の工場収益を別として計上したものであるが、當社は今期以降はこれが収益力にも相當の期待がなし得る故今後の収益、利益増は必至である。先づ溝口齒車の収益を今期二十五萬



圓として買収代金四百萬圓の利息約十萬圓を控除して正味利益十五萬圓が確實に這入る。溝口齒車合併前の収益豫想五十四萬圓に十五萬圓を加へると六十九萬圓約七十萬圓に達する利益が計上される。

### 八分配當持續か

八分配當をして、より以上の餘裕が認められれば、拂込徴収を斷行して増資する。今期の利益を七十萬圓と見て拂込資本五百二十萬圓に對する利益率は約二割七分だから、八分配當は樂に行はれる。八分配當に要する金額は二十一萬圓だから此れに加ふるに役員賞與、退職手當基金積立金を十萬圓を加へて三十萬圓内外だから、殘額四十萬圓は社内保留と償却に振向けられる。配當の安全性は此處にある。利益は薄い事業だが、軍需注文と平和産業機械の生産に従事する會社が二割五分の利益を保證されてゐる様な財界状態である限り配當に危険性がない。況や今日の産業界が生産機構不足時代にあるに於ておやである。であるから注文生産的軍需工業で獨占的な事業である當社の配當八分踏襲は確實なものと思ふ。かゝる堅實な内容を持ち乍ら、當社は軍需關係にあるのと擴張設備費の爲めに今期は増配は控えるものと思ふ。先づ當分當社は八分配當持續後に時期を見て増資拂込を行ひ、而して、膨脹資本による収益力の増大が今日の場合急迫せる要務である。

### 今後の収益力

當社の事業は元來殆ど獨占的な地位にあり、大別すると軍需鑄、鎖の製造及び兵器がそれで、この他に諸化學工業機械の製作に従事してゐる。軍需工業の中に平和的獨占的機械製作業を持つほど強味はない。更に今日の状態からして化學工業用機械の受注増があるから、此處當分は活況を呈すること、見るのが至當である。此れに齒車工場を買収後の収益が本格化して來るから先づ今後暫くは同社の収益力は安定したものと云へる。化學用機械はドイツ兵器工廠クルツプ會社の姉妹會社たるルルギーの特許權の買入れをなして以來注文殺到の盛況である。設備擴充と合併會社の収益時代に這入る頃は大した利益を計上し得ることになる。尙齒車工場にしても合併に依て原料鋼材、鑄鋼の自給自足が出来る結果、合理化せる利益が其處に生れる。而して鑄鋼材の自給は齒車工場の製品採算を良好ならしめると同時に鑄鋼工場の擴大ともなつて一舉兩得と云ふことになる。収益力増大はかくして理論付けられるのである。溝口齒車の収益を當社合併前の収益力と四對六に見ても齒車の収益が四十萬ならば百萬圓の利益が出て來る譯である。

### 溝口工場買収と齒車工場の内容

當社の創業は明治四十三年で溝口良吉氏の個人經營に始り、爾來三十有年溝口氏の不屈の事業精神と技術の鍊磨と相俟つて業績は累期向上を辿り、昭和四年來大阪市西淀川區佃町に、仕上、研削、旋盤、

大型齒切機械各工場の建設を漸次完了昭和九年一月には親戚縁故者數名の出資に依つて資本金六十萬圓の合名會社組織に變更、其後更に増資を行つたもので昭和八年以來從來の齒車製作加工の外第一次インフレの餘波を受けて機械工作業にも力を入れる様になり、賣上額は年額百四、五十萬圓以上で利益金は二十五萬圓乃至三十萬圓以上を上げて來た。然らば溝口齒車は何の位の總資産、純資産を保有する會社であるかと云ふと、正味資産約三百萬圓内外と評價すべきが妥當で此れ以下、此れ以上に評價するのは當らぬが、先づ機械設備その他一切の財産評價が三百萬圓で、買收價格四百萬圓の殘額百萬圓は營業權の評價額である。買收までの狀勢からすると造船、海運界の活況に依り、當社製品の受注増の傾向は著しく、軍需品齒車は大部分材料支給、工賃勘定で得意先は安宅商會、大倉商事、乾商事等の代理店を経て川崎造船、神戸製鋼、滿鐵、陸海軍海工廠、石川島、浦賀ドック、住友金屬等の一流筋であつて特に優秀船のタービン用齒車は當社が獨占的に製造されてゐるものであつた。これ等を考察するに純資産に加へるべき營業權即暖簾の評價百萬圓は安過ぎる。だから溝口齒車工場買收は製鎖に執つて妙を得たりと云ふべきである。因みに今後百萬圓を収益力年額五十萬圓として二ヶ年に元子迄取戻し得る譯で、先づこの買收は當社に執つて成功と云へる。尙詳しく云へば當工場の収益力を年額四十萬内外と假定して見ても一ヶ月三萬餘圓の純益を上げれば良い。その上合併前より當工場の負擔する原料仕入に於ける壓迫、危険がないからそれだけ利益は増加する。資本能力と生産力の比例は以上に依て見る如く、堅實であるから製鎖の今後を約束する一威力となるのは溝口工場の以上の内容である。

### 溝口工場の今後

同社の溝口工場買收は凡ゆる意味から成功であると云へる。即ち溝口工場は今後年收六十萬圓以上の利益を擧げ得る、而して製品賣上額は二百萬圓近々もあつて今後共に受注増加が約束されてゐる。これを四百萬圓で買收したのだから、利益割合は一割五分となる。尤も溝口工場買收資金の中三百萬圓は興銀よりの借入金だから利割負擔がある。利拂負擔を五分と見て十五萬圓で殘る四十五萬圓が本社の利益率に加はることになる。此の四十五萬が四百萬圓に對する利益率は一割一分となる。かく見る時溝口工場買收は先づ有利なものと思ふ。これが同社の從來からの利益金五・六十萬圓に加算されるとすれば毎期八十萬圓近くの純益が裕に計上し得る譯である。以上の如く溝口工場の買收成果が有利であると同時に當社は一般産業界の好調で鎖、機械、罐の需要は依然として旺盛なることから今後益々受注増加が豫想せられる。殊に陸、海軍御用と云ふ確かな受注先を持つて居り、今後の國防豫算増大からその大量注文が期待される。その上最近に到つては諸種の擴張設備が完成され、それが収益時代に這入るから収益増は必至である。既に七百萬圓を突破する受注額があり、これから見て今期末の受注額は八百萬圓近くに及ぶのではないかと推測する。尙横濱工場の受注増、引渡高は前期より異常な増加を推測されるから、正味引渡高は四百五十萬で前期より百萬圓の製品賣上増加となる。此れに前述の溝口工場収益を

考察すると該工場買収に依て資本が膨脹して資本負擔と資本流用効率とが不均衡を來す様に見られたものが、却つて有利に展開する結果となる。

### 製鎖株の資本配分

當社の今期増配は資本膨脹と収益力のバランスを見ると考へられない。而して當社の配當には軍需關係から相當の抑壓もあり、増資拂込後の資本能力及び資産内容から検討して差控えるべきが至當である。併し當面の八分配當持續による堅實經營は、將來の収益力の源泉ともなることから考へて妥當なものである。但し収益増、受注増に迫られてゐる當社の現状から推して今後の増資拂込も必至必定と云ふ處ではないかと思はれる。製鎖、製罐、化學工業機械の注文雜踏に直面して、その消化に悩んでゐる状態である。そこで各工場に亘つて擴張に大童の状態である。デイーゼルエンジン製作に當つて差當り、七、八十萬圓の別途投資に依り、一千萬圓の四分の一拂込の新會社設立は事實上の増資である。かくして製鎖株一に對しデイーゼル株一が割當てられる。然らば當社株の採算はどうか。營業成績向上は左に記せることから判然する。

- 一、受注増による增收必至
- 一、溝口工場の収益増加

### 一、軍擴とインフレの實質化

#### 一、化學工業インフレ反映

#### 一、インフレと平和産業機械の受注増

以上に依て見ても分る通り當社の収益は牛永久的に漸増する立場にある。處が毎々の拂込徴収は生産設備の擴張資金に流用され、流動資金は殆ど使ひ盡されてゐる。而して昨年下半年の支拂手形は二百五十萬圓以上を算し、この上溝口工場賣收資金が三百萬圓、擴張新設費百萬圓合計四百萬圓が加はるから借入金のみで六百萬圓以上となる。簡単に考察して見ても現在拂込五百二十萬圓と借入金とは不釣合である。だがかくの如き資産内容を持つて居り乍らも業績向上が日々顯現されて居る故、借入金の資本化及び増設、增收となるは當然である。借入金を資本の別働隊とし、而してデイーゼル會社を別働隊として収益増が計畫されてゐることは當社首腦者の妙手である。

### 當社株の採算

拂込増資が本年二月末に行はれて八分配當持續と見て現在八十四・五圓の製鎖株は妥當か否か。先づ八分配當を株式インフレ下の四分に買つて百圓近くに採算が執れる。四分五厘利廻としても八十九圓見當である。而してデイーゼルエンヂンを事實上の子會社と見て検討せば、新會社（エンヂン）株權利は

親株（製鎖）の五掛から四掛半であるから製鎖株採算は左の如くなる。

八分配當（利廻）五分 八〇圓

新株權利（五掛） 十五圓

計 九十五圓

これをデイーゼル株の三割配當を確定的なものとして採算すれば左の如くなる。新會社株採算をなすならば三割配當の（利廻五分）は七五圓となる。これから拂込を控除すればデイーゼル株そのものゝ事業價值は六二圓五〇錢に評價される。故に新株權利及事業評價値たる新株増の製鎖株を採算すれば左の如くなる。

八分配當 五分利廻 八〇圓

新株權利 五掛 一七圓

新株評價 六二圓

計 一五九圓

であるから製鎖株今日の相場から考へて見て以上の採算から云へば一六〇圓以上に買へる譯である。若し十二年下期以降の業績向上と財界好轉の影響で一割配當が斷行されるとせば

一割配當 五分利廻 一〇〇圓

新株權利 五掛 一七圓

新株評價 六二、五圓

計 一七九、五圓

一八〇圓迄は買ひ得る。以上を尙堅實な見方を以て考究するに八分配當の場合一五九圓から新株權利を控除し、一七三圓に買へる。況んや今後の増収に依て業績實質向上が考へられ一割配當可能も豫測せられる限り、此の採算及此の意見は妥當なものと思ふ。

## 製鎖の實質と新會社 デイーゼル會社設立

諸機械製作會社と云つても鐵鋼製品及船具材料の範疇を出でなかつたのが大阪製鎖である。處が製鎖會社は多角經營の本質化を目ざして絶えず諸事業、諸方面の研究に餘念がない。この賜物として同社は我國交通産業の原動力たるべき自動車エンジンの製作に着目して一昨年東京に研究部を設置研究を續けた結果、昨年（十一年度）夏に至り漸くその完成を見た。右の研究は東京工業大學教授工學博士淺

川權八氏で氏は我が國に於けるエンジン學界の最高權威者である。同製品は氣筒容積四×一〇〇×十一四〇の四千馬力高速ディーゼル機關で從來諸會社の作れるディーゼル車よりコスト低率であつて性能はより優秀である。同社は過般此の淺川式ディーゼル車の積載量二噸貨車を製作し既にテストを完了したることである。性能テストの結果を見るに既存ディーゼル車に比較して遜色なく、現在二臺ある試作品は既に千呎走馳にも絶対に故障ないことである。これに力を得且つ自信が付きディーゼル製造に於ける我國一流製作所に對抗製作に従事することになつた。此處に製鎖のディーゼル車製作會社の設立發端があるのである。尙三菱重工、新潟鐵工、池貝鐵工、日立製作等斯業界の一流どころが製作する機械より製作費が少なく、性能がより良いと云ふ點で自工業界乗出しが確信づけられたのであらう。

## 新會社の内容

交通産業の進展範圍が未だ我が國では多分に残つてゐるのだから、製鎖の自動車工業界乗出しは業界に貢献する處大なるものである。當社の設立計畫に依るエンジンは卷末にある東京工業大學の研究速報にもある如く、購入してから經濟的であり、購入代價も他の諸車より低額である點は驚嘆する。而して同社はこれが製作に別働隊として資本金壹千萬圓の新會社を設立することとなる故、實現の上は我が國に於ける優秀なる自動車工場となることであらう。以上の如き重き使命と自工業界に革命的製品を送り出

さんとするディーゼル會社の企業化は此程漸く決定を見、資本關係は現在製鎖の大株主たる古田氏及び某銀行との共同出資に依るものを聞く。差詰め壹千萬圓の四分の一の正味二百五十萬圓の自動車會社が此處に生れる譯である。本工場は東京方面に設置し、天下に大々的に呼び掛けることになつてゐる。而して不足せる自動車工業を補足し、エンジン原價低下率を高めることに盡力する。然らば本社の製造にかゝるエンジンは如何なるものか、原價計算からすると國産自動車で今日一番廉價なのは三菱重工製品の四千五百圓で次が日立製作の六千圓、池貝の六千五百圓と云ふ順序になつてゐる。勿論エンジンの標準値がこれであるから自動車そのものの價格は相當な額に上る。處が淺川式ディーゼルエンジンは如上の諸會社製品に比較にならない程低廉で一臺が約千圓内外で製作し得る。エンジンそのものの性能は變らない處に淺川式の特徴がある。エンジンを製作することに依て新會社の収益を検討せんか。製鎖の妙味は益々津々と云ふべきものがある。

## 新エンジンの性能

従來のディーゼルエンジンはボツシユの高壓式燃料ポンプを使用したのであるが、淺川式ディーゼルエンジンは低壓式三百氣壓を以て重油を内燃せしめる様になつてゐる。而してボツシユの燃料ポンプを使用せぬ淺川式ディーゼルエンジンはボツシユ使用のエンジンより廉價に上る。重油使用量の點に於て

比較して見ても、従来のガソリントラックが八圓の燃料を使消するに對してその八分の一の重油で足りる。八分の一の燃料で同一の使用に耐へ得るのだから、これが企業化は緊急の要務とすべきではないか。然らば現在製作が完成してゐるディーゼル貨物車二輛車の性能を見るに、重油五ガロン使用に對して一二五軒の走行力を持つて居り、七分の一勾配の坂を平常速度で裕に走れるとのことである。同社では之れに自信を得四×九〇×一二〇三十馬力一輛半貨物車の試作の完成に務めて居る。依て製鎖會社はディーゼル車製造會社設立に依て右二種類の製作を行はんとしてゐる。而して之れが設計製作には元芝浦製作にあつて工場長を勤め、エンジニアの名聲高い中原綱太氏が技師長としてこれが監督に當る由である。斯くの如くしてエンヂン製作陣が整備された今日市販政策さへ宜敷しきを得ば、最早世界的な新エンヂンの自工界進出は十中の八九迄成功と云はねばならない。

### 新會社の収益力

ディーゼルエンヂンの月産能力が新會社の設備からすると百臺は樂に製作し得ると當局者が云つて居る。然らば月産百臺が年産千二百臺は製作し得ることになる。賣價二千五百圓の淺川式ディーゼル貨物車が製作費壹千圓を控除して、利益金は一臺に付き一千五百圓である。故に年産一、千二百臺の實収益は百八十萬圓に上る譯で、資本金壹千萬圓拂込資本二百五十萬圓に對して、利益九十七割二分に當る。處

# 自分が設計製造した小形ディーゼル自動車機関<sup>(1)</sup>

(昭和11年12月21日故根岸政一博士記念講演會に於て講演)

正員 浅川 権 八<sup>(2)</sup>

ディーゼル機関が自動車のガソリン機関に代用されることは近時一層盛んになった。而してその主な理由はガソリンに代ふるに廉價な重油が而もガソリンよりも少量に使用し得る点である。将来自動車が一層多数となり、ガソリンの値も高まり且又ガソリンは自動車以外に用ひねばならぬことを考へると代用燃料の問題もあるが劣等液体燃料を而も少量用ひて足るディーゼル自動車を用ひられることは明かである。

現に歐米各國ではディーゼル機関製造者は50<sup>(3)</sup>を超えてゐる次第である。一括して云ふとディーゼル自動車機関はシリンダ内径85~160mmで100mm内外が多数に用ひられ、シリンダ数4又は6が多数である。何れも1~3t車に用ひられてゐる。自動車機関として重大性を持つ燃料消費量は製造者に依て異なるが概して全負荷に於て毎制動馬力時200g内外が多数でガソリン機関の消費量の約半分(容積)である。故にディーゼル自動車とガソリン自動車との燃料消費額の比は15~18でディーゼル自動車は燃料費が頗る少ない經濟車と保證し得られるのである。

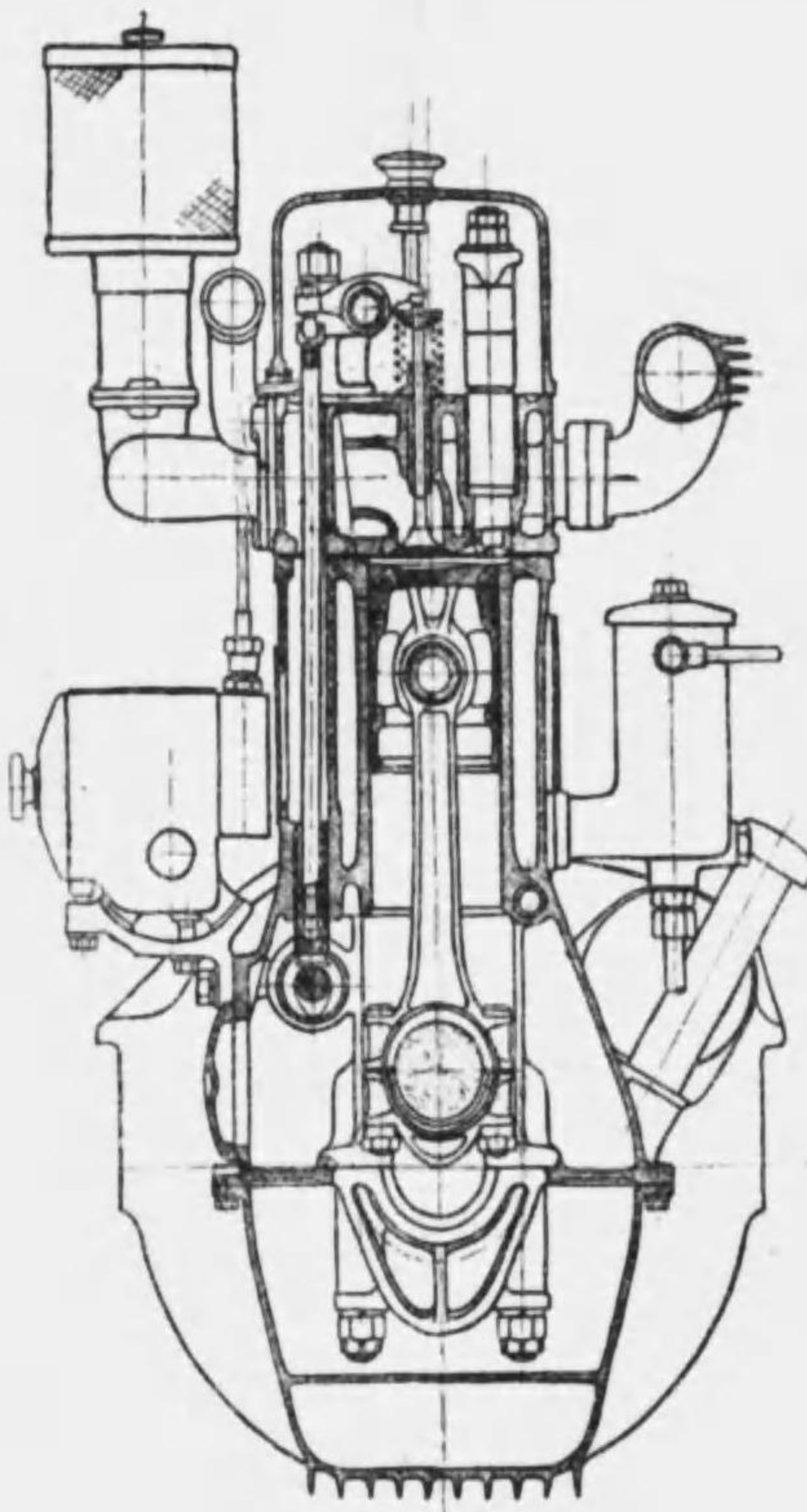
我が國でも現に多数の試作者があり、既に公表されたもの(内著名<sup>(4)</sup>なのは新島、池貝、三菱重工業、日立等である。併し何れも格別に安價である様には見えぬ。以上述べたディーゼル自動車が何故に急速にガソリン自動車を駆逐し得ないのかと云へば全く運轉經濟の問題に歸着し、ディーゼル車は如何にも値が高過ぎることになるのである。一日に云へばディーゼル車1臺を買ふ金でガソリン車2臺か3臺を買ふことが出来る。斯様な高價なディーゼル自動車の原價消却勘

定はガソリン自動車に比して思はしくない。例へばガソリン自動車が1日ガソリン8圓を消費するとし、同一の働きを爲すディーゼル自動車が1日重油を僅で1/6消費する。即ち1圓33錢を消費すると假定すれば1日6圓67錢の利益がある。故にディーゼル自動車はガソリン自動車に對して1ヶ月200圓の利益を生む。而してガソリン機関1臺700圓とし、ディーゼル機関1臺5000圓と假定するとその差額5000-700=4300圓を燃料費利得金で消却するには利子等を算入

すると約2ヶ年を要する。即ち使用2年後からディーゼル自動車は1日6圓有餘の利得を生む勘定になる。斯る次第であるから當業者がディーゼル自動車に速かに指向かぬのも誠に無理からぬ處と考へられる故に運轉費の低いディーゼル自動車を急速に普及させるにはどうしても頗る廉價なディーゼル機関を造つてこれを我が國に於て最も需要の多い1t又は1.12t積のガソリン自動車の機関に容易に而も簡単に換置し得る様にする必要がある。以上の理由に基いて自分は1t又は1.12tの貨物車又はバスに適する、特にフォード車、シボレー車には容易に取替へ得られる様なディーゼル自動車機関を設計し製造して見たのである。又2t車用の大型のものも目下試作中である。

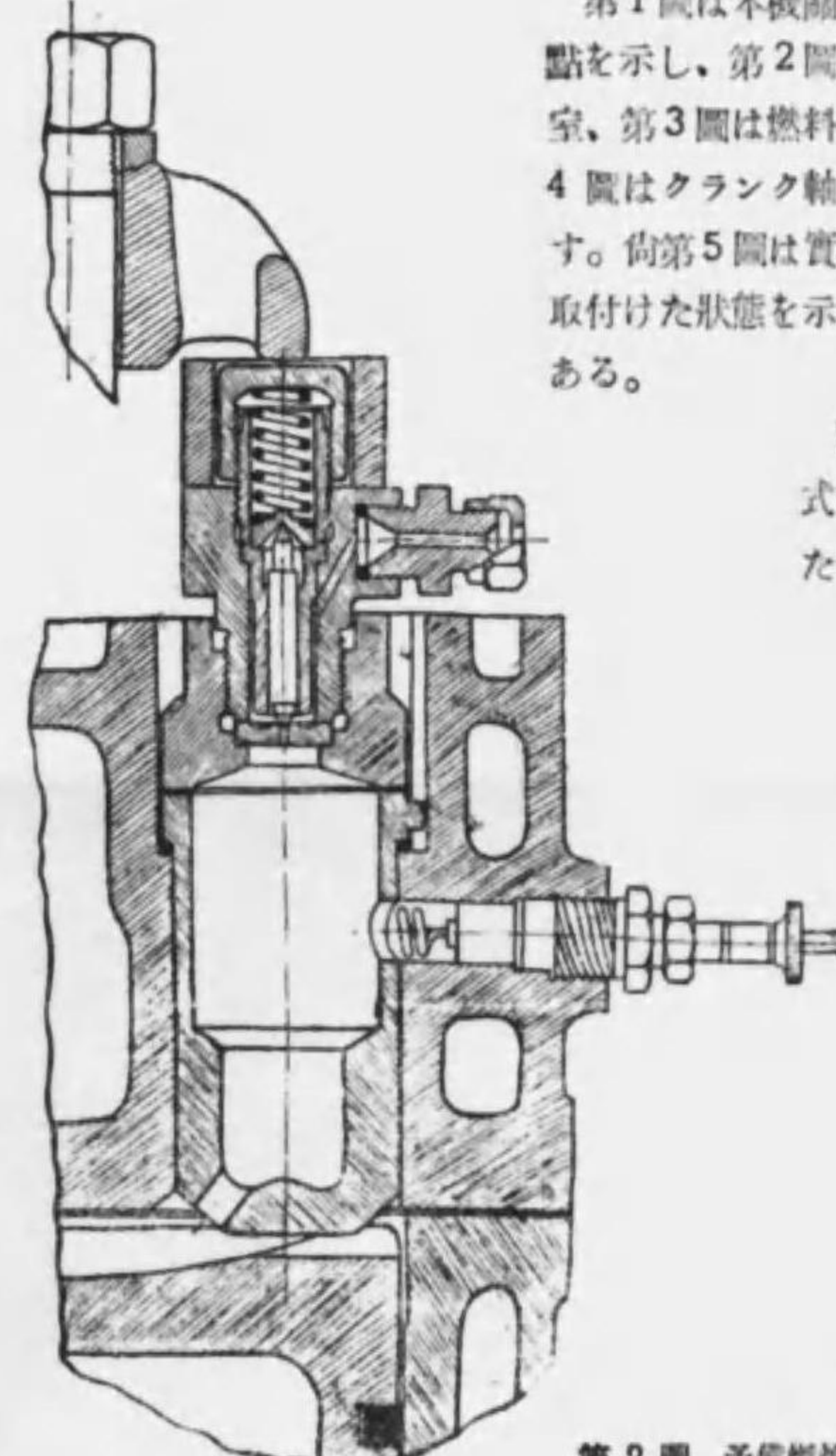
設計の要點は(1)外箱の大き及び要所の形狀はフォードA型四シリンダと同一にする。(2)各部分は構造簡單、取扱容易なるを主とする。(3)クランク軸を廣く造ること

(4)歐米各國のディーゼル機関製造者が殆ど90%以上もボツシュ燃料ポンプを用ひてゐるに對し、至つて廉價な特殊設計の燃料ポンプを使用すること等々である。勿論廉からう悪からうでは困る。耐久性を考慮し且適當の地金を選んで極まる處即ち要所の工作は特に精密ならしめることは云ふ迄もない



第1圖 機関断面略圖

試製ディーゼル自動車機関は堅型四シリンダ、四サイクルでシリンダ内径90mm、行程120mm、壓縮比20:1、最大制動馬力2000rev/minで32HP、回轉速度は毎分最大2400から最小500回轉迄その間を自由に變へることが出来る。これはアクセルの足踏一舉動で行はれる。運轉の具合は良好で震動は輕微で排氣に黒煙等は認められない。全重量は340kgである。



第2圖 予備燃焼室

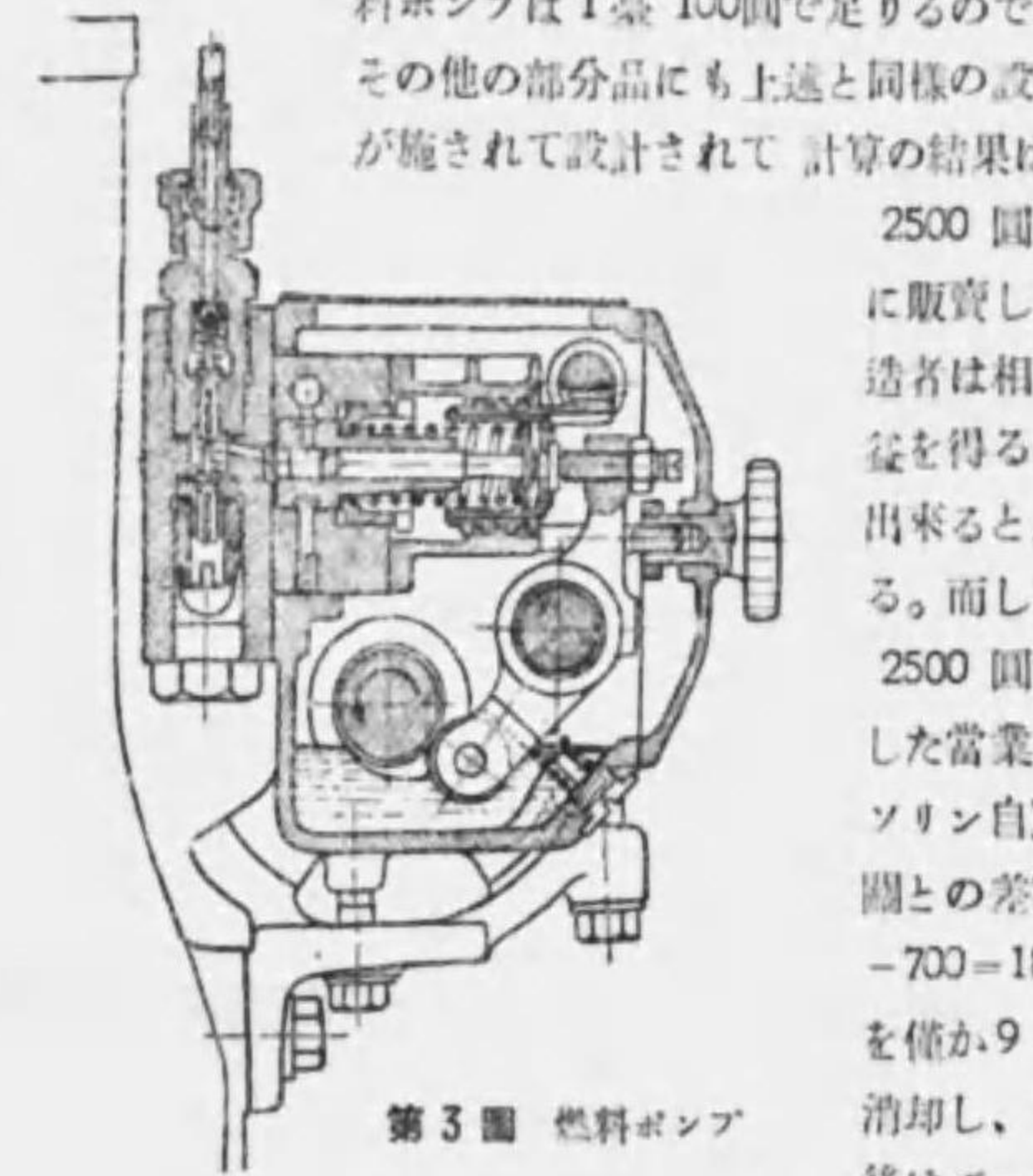
第1圖は本機関の構造の要點を示し、第2圖は予備燃焼室、第3圖は燃料ポンプ、第4圖はクランク軸の略圖を示す。尙第5圖は實際自動車に取付けた状態を示した寫眞である。

予備燃焼室式を採用したために燃料ポンプ

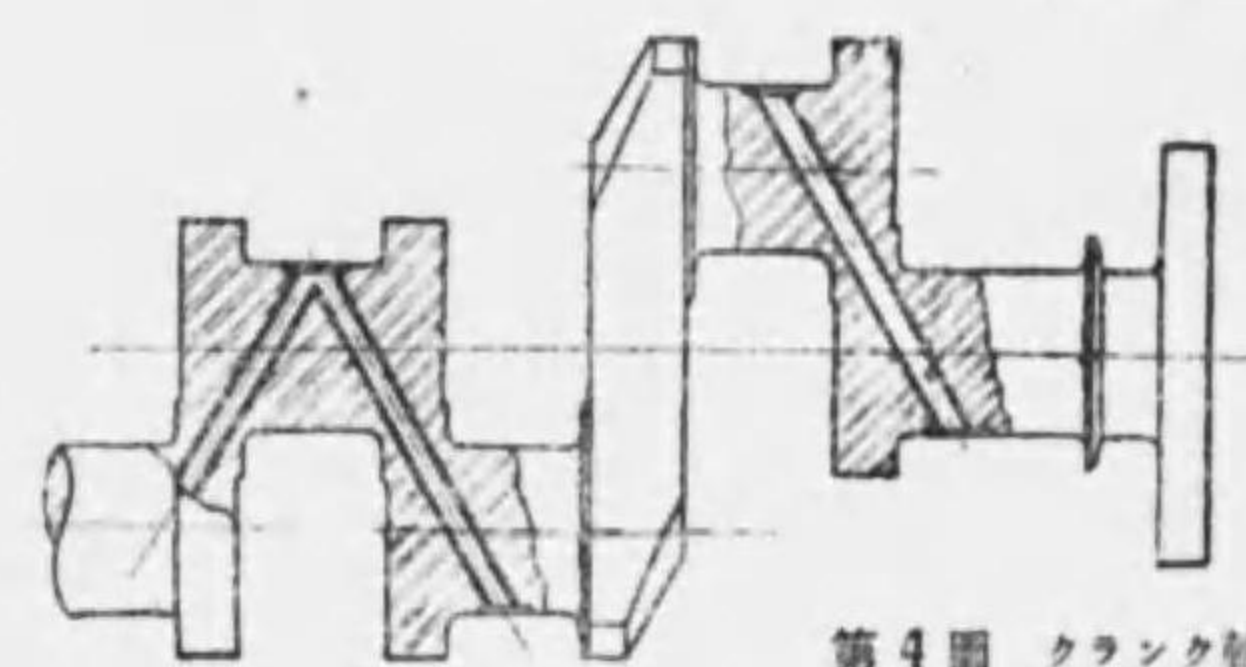
成した。これがためバランス用の錘は好きな形のものに設計し得られ且又仕上の部分が鍛造クランクに比して著しく少いために例へば試製における計算でもクランク軸1本仕上共85圓で出来た。これを鍛造製のものが600圓程度を要するに比して格別に廉いと云へる。

又前述のボツシュ・ポンプ1臺800圓内外に比し自分の燃料ポンプは1臺100圓で足りるのである。

その他の部分品にも上述と同様の設計工作が施されて設計されて計算の結果は1臺2500圓の廉價に販賣しても製造者は相當の利益を得るに出来ると思はれる。而して1臺2500圓で購入した當業者はガソリン自動車機関との差額2500-700=1800圓を僅か9ヶ月で消却し、それ以後はディーゼルが



第3圖 燃料ポンプ



第4圖 クランク軸

ンプの壓力は120atmで足り、從つてポンプの構造も工作も簡單容易であつた。ポンプ・プランジャの直徑は6mmでボツシュ型のやうにこれを廻さないで、手前に設けられたねちとピョーン・ラツクの仕掛によりその位置を變へて1回の送油量を變化し得るのである。これを爲すにはガソリン自動車のアクセルを片脚で適度に押せば良いのでガソリン車の習慣をその儘踏襲して加速装置とした。

次にクランク軸であるがこれは電氣炉で熔解した、而もクランク地金規格の鍛造用鋼材よりも一層良質な鋳鋼製で、加ふるにクランク・ピン注油所の孔は鋼管を鋳グムルことで完



第5圖 自動車に裝備した状態

莫大な利益を生む勘定となる試作ディーゼル自動車機関は昨年6月2臺完成し、3ヶ月間連続性能試験を東京工業大學内燃機関實驗室で行つて改造修正を施し、實驗室の試験を終り、1臺は現に第5圖に示す如くフォードV-8、1800kg積貨物車に取付けて實際の運轉試験を行ひつゝある。試験には専らミリ重油を使用した消費量は1制動馬

力時220~260gである。以上述べた様に設計上、工作上の特殊の工夫に依つて所期の目的通り相當の性能及び確實性を持つたディーゼル機関を頗る廉價に造り得る自信を得た次第である。

(1) The Small Diesel Automobile Engine. Designed and Made by the Author. (2) Gompaty ASAKAWA, Member. The Tokyo University of Technology, 東京工業大學。 (3) 浅川著、ディーゼルエンジン、第7版(昭和11年版)、附録高速ディーゼル機関参照。 (4) 機學會年鑑、昭和11.12年版、参照



が將來は此上設備を完備し、原價の低下を圖り一臺に付四百圓のコスト低下が望み得ると當事者は云つて居るが、若しこれが實現するとすれば収益は約倍加することになる。以上の如く當社の利益が確定付けられるとすると増産計畫、社内保留に要する金額を収益の半額計上しても三割以上の配當は可能である。



企業叢書

忽ち十版突破!

(昭和十一年十二月二十日發行)

「第一輯」 國策に躍る石油

定送料 貳金參拾錢

五版出來

(昭和十二年一月十日發行)

「第二輯」 一九三七年の景氣と投資

定送料 貳金參拾錢

「第三輯」 株式賣買早わかり

定送料 貳金參拾錢

「第四輯」 インフレ心得帖

定送料 貳金參拾錢

絶讚!! 増刷 出來、即刻申込まれよ。時勢に迎合せる石油事業の妙味、本年の景氣は? 而して投資方針は、確定されましたか先づ本書に依つて指針を確立せよ

事業内容

大阪市北區堂ビル二階

日本景氣研究所

振替大阪七七一六八番  
電話代表(北)五八九〇番

日刊景氣日報の發行

(研究会々員に頒布す  
會費 壹ケ年 百圓)

半ケ年 六十圓 一ケ月十五圓

財界の動向は、財界人にその針路を教へる。人間は生れて死ぬる迄經濟を離れてその存在はない。あるとすればそれは偽裝社會に生きる夢遊病患者のタハゴトである。經濟生活の粹は、資本主義經濟の上に生き資本主義經濟の粹即ち資本主義の華街は、相場街である。人生の修練場、其處は資本主義の權化とも云ふべき、株式市場であり、亦その他凡ての相場街である。資本主義の極致は、人間本能的の權致と相等しいものだ。人間本來的の極致を求めんとせば、相場街の持つ姿を、求めねばならぬ。此の偉大なる眞理の上に立つ人間、而して、相場、これのみが財界人の進むメインストリートなのだ。損するも得するも、皆この心理趨向の調査、探索力の濃淡に依るのだ。此れを最も的確に精密に把握し、財産保全増殖に成功せんとするものゝ爲めに、弊所は「日刊景氣日報」を發行す。

月刊景氣新報の發行

(壹ケ年 三  
半ケ年 一圓七十錢)

會社内容の調査

事業調査

今や景氣は新階段へと歩を進めんとして居る。新時代に生きんとするものは、先づ新時代の法則の上に立つて、事を畫さねばならぬ。弊所は此の秋に方り近代起り、新時代の覇者たられんとする人の爲めに、事業の調査、會社内容の調査、その他政治經濟内外財界事情の調査を致します。尙事業調査にあつては、如何な事業、會社なりとも過去の業績を御示し下されば將來の業績なり、次期決算期に於ける業績なりは、数字的に豫測觀測してこれを明示致します。何卒御利用の程を!!

昭和十二年四月二十五日印刷  
昭和十二年五月一日發行

【定價參拾錢】

版權所有  
禁轉載引

著者 田 中 一 民

發行所 日本景氣研究所

印刷者 高 尾 末 吉

大阪市西區江戸堀下通四丁目三〇

發賣所 日本景氣研究所

販賣所 その他各書店・鐵道驛構內賣店  
各都市・百貨店及び警所支局に有り

大株一般取引員

松井輝三商店

大阪市東區北濱一丁目  
電話代表北濱六四四番

公債、社債、株式賣買

株式會社

六三商店

大阪市東區今橋  
電話北濱三三九七番

本社 大阪市旭區關目町

旭土地興業株式會社

||現代人は新進土地へ

興業へ||

本社 大阪市北區宗是町大阪ビル内

# 大阪商船株式會社

|| 海旅は近代的サービスと

諸設備完備せる商船で ||

本社 大阪市東區久太郎町

黒川ビルディング内

# 日本製鋼株式會社

社長 田口大次

◇ 輸 運 上 海 ◇

本社 神戸市神戸區榮町通り四丁目

日東運輸合資會社

大阪築港支店  
大阪川口支店

保險共同!! 躍進日本!!

共同火災保險株式會社

海 上 部

本社 大阪市北區曾根崎上三丁目

◇ 紙 工 と 文 具 ◇

大阪紙製品組合機關紙

紙 工 界 社

主 宰 野 口 茂 樹

大阪市東區左官町

ユニバーサルランプ株式會社

井 上 壽 三

本社 東京市京橋區銀座七丁目

# 大日本麥酒株式會社

大阪出張所

大阪市東區北濱二丁目

本店 大阪市西區太郎助橋電停前

高級支那料理

黃鶴樓

社交的商談に!!

優雅なお交き合ひに!!

373  
22



終

